

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育(研究))

法人名 九州大学

学部・研究科等名 教育学部・人間環境学研究院

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

事例1「萌芽的学際研究に対する研究助成」

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

平成20年度は、「『日常型心の傷』の視点から捉えたアカデミック・ハラスメントの実態把握と心理的支援システムの構築」(研究代表者:行動システム専攻研究生小田部貴子、他3名)というテーマに対して69万円の研究助成を行った。このプロジェクトでは、九州大学の大学院生を中心に1,700部の調査票を配布し、528名(回収率=31.1%)から回答を得た。

本調査の結果、アカデミック・ハラスメントの学生への影響、あるいは、学生の適切な対応を可能にするための環境作りなどに関して有益な知見が得られた。詳細は、研究成果報告書にまとめられている。さらにこのプロジェクトにおいては、学生が中心となり企画した内容をもとに詳細な計画が作成され、その計画に教員が参加するという方式をとっており、このようなプロセスによって新たな研究活動の形態が模索できたと考えられる。今後の展望としては、回答の詳細な分析やインタビュー調査等を行いながら更に研究を進め、具体的な支援システムの構築に向けて取り組む予定である。

平成21年度は、「『動的指導体制』に基づく学際研究ネットワーク創りの試み」(研究代表者人間科学部門准教授飯嶋秀治、他4名)というテーマに対して55万円の研究助成を行った。これは、人間環境学府における都市共生デザイン専攻、人間共生システム専攻、教育システム専攻の3つの専攻をまたがる試みである。またこのプロジェクトは、EEP(九州大学における「教育の質向上に向けての取り組み」のプロジェクト)と連携して、本来の学際部局としての人間環境学府の学際的・教育・研究を推進するための企画であり、当部局の将来の教育・研究体制を先取りしたものとして位置づけられる。

当プロジェクトでは、指導体制を柔軟に修正することによって、固定された指導体制では対処できないような研究指導上の問題点の具体的解決を目指した。発表者と指導する教員を決め、具体的なテーマについて発表を行い、その際に指導体制を修正していくことによってどのような指導上の利点、発表への効果的なフィードバックがなされるかを検証した。詳細は、研究成果報告書にまとめられている。

毎回の発表2週間前には、ポスターを学内5カ所に掲示し、人間環境学府のメーリングリストで学府構成員全員に周知した。また発表者からは事前に論文を提出してもらい、質の高い発表・討論が行われるように計画した。発表の際には、発表主題に応じて適切と思われる教員を外部からも招聘し、発表および討論の様子をビデオ・カメラに収録し、後日そのやりとりを分析した。

主題としては、久留米のラブホテル街、沖縄の郊外ニュータウン、福岡市におけるホームレスの生態などを取り上げ、討議・分析を行った。これらの主題に対して様々な観点からの指導を行うために、共生社会学、ジェンダー史、視覚効果、ホームレス支援といった分野を専門とする教員・学生などを動員し、柔軟な指導を実施した。上に述べたように、人間環境学府の3つの専攻、都市共生デザイン専攻、人間共生システム専攻、および、教育システム専攻の教員・大学院生が参加して積極的な活動を展開した。